

お父さんはアンドロイド

綾乃

お父さんはアンドロイド

私にはお父さんが二人いた。「今日はほんとのお父さん?」「ああ、お前のお父さんだよ」「今日はほんとのお父さん?」「ああ、お前のお父さんだよ」お父さんはいつも同じ返事をした。お父さんは、二人いる。私と血のつながったお父さんの体の中には、アンドロイドのお父さんが同居していて、アンドロイドがお父さんのふりをしている時にはお父さんは体の中で惰眠をむさぼっていた。お父さんとアンドロイドのお父さんを見分けるのは大抵無理だった。アンドロイドのお父さんは髪をびっちりセットしているのに、生身のお父さんは後頭部がぴよんとはねていることに気づいていない日もあった。アンドロイドとお父さんは必ず同じ返事をした。お父さんが、自分の性格をインプットしたからだ。でも、一度だけ、アンドロイドとお父さんは別の返事をしたことがあった。私がお父さんが大事にしていたどこかの球団の選手のサインボールを落書きだと思って外で投げてしまったことがあった。そのときお父さんはアンドロイドで、「ごめんなさいお父さん」と言うと、「いいんだよ」と笑った。それから一時間後、目覚めたお父さんはそのことを知り激怒した。「なんてことしやがったこのxxx娘」と私を口汚くののしった。お父さんは自分を実際を過大評価してアンドロイドに設定していたようだった。それ以来、お父さんはアンドロイドのお父さんが言うであろうセリフを考えて言うようだった。機械に支配されたお父さんが悲しかった。私が嫌みを言うと、こめかみに青筋を立てながら笑う癖もいつしかなくなった。アンドロイドの中にお父さんがいるように思えた。「お父さん、私結婚したいの」私はある日、お父さんにそう言った。お父さんは、「ほんとうか、そのうち家に連れてきなさい」と言った。翌朝、アンドロイドの中から目覚めたお父さんは、「結婚なんか許すかこのxxx娘!」と罵った。私はその口汚さが愛しく、笑って、生身のお父さんと口喧嘩をした。結婚式の間中お父さんは、アンドロイドにならなかった。「あのクソ男からお前を守るのをアンドロイドに任せるわけにはいかない」お父さんはそれから、ずっと口汚い。